

開催地名：岡山県岡山市	
開催日時	令和2年11月8日（日） 14：30～16：00
開催場所	岡山市百花プラザ
語り部	菅野 澄枝 （宮城県仙台市）
参加者	岡山市内の自主防災組織代表者、役員 約100名
開催経緯	<p>自主防災組織によって課題はまちまちだが、洪水時に避難場所が近所がない、要支援者の扱いがわからない、自助で手一杯で共助まで気が回るはずがない、自主防災組織を結成したが何から着手すれば良いかわからない、防災訓練を行っても同じ人しか参加せず知識の普及につなげていない、毎年複数回の防災訓練を実施しマンネリ化に頭を悩ませている等々が挙げられる。今回の講演で避難、誘導、避難所運営などの、自助、共助に関する必要性を学び、今後の防災活動の一助としていきたいと考える。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>皆さんがお住まいになっている町は、皆さん自身の町である。行政関係者が所有するものではないし、市長や町長の町でもない。また、誤解を恐れずに言えば、この国も、総理大臣だけのものでは決してなく、私たちの国である。私たちの国、市、町であるならば、お互いに助け合うこと、大切な隣近所の方々や、家族を守ることは、私たちが当然すべきことと言える。これらのいわゆる「共助」について、東日本大震災以後、行政は仕事として援助してくれたり、協力をしてくれるようになった。私はそう考えている。</p> <p>（２）避難所での気づき</p> <p>東日本大震災発生後、私が近所の避難所に行って、実際に運営の手伝いをして気付いたことは、自分が全く役に立っていないということである。少しでも役に立ちたいという気持ちもあるし、やる気もあるのだが、避難所を運営することに関して、何の知識もないことに気付いた。そのため、トラブルが発生しても対処方法がわからなかった。避難所には、炊き出しの量が200人前しかないのに、ざっと見ても500人以上の人たちが避難してきていた。初めのうちは全員にいきわたるように工夫して対応していたが、運営に疲れてくると、201人目以降の方に対して、「ないものはない」という雑な対応になってしまった。並んでいる方からすれば、少しでも多くの人に配給すべきだという思いがあるのは当然なので、そこでもめることになる。自分たちの力の無さを痛感した。</p> <p>そんな時に助けてくれたのは子どもたちだった。子どもたちが、自分の家族がもらった食料の中から「少しでもみんなに」という思いで、もらえなかった人たちにバナナやおにぎりを配ってくれた。子どもたちのそんな姿を見て、食料が行き渡らなかった人たちの気持ちも落ち着いたのだ。</p>

(3) 東日本大震災の教訓

東日本大震災以前も、宮城県には自主防災組織がいくつも存在し、それぞれ活動を行っていたが、自主防災組織としての活動をしっかり行っているところは少なかった。ところが、東日本大震災を経験して、みんなで力を合わせなければこのような大きな災害は乗り越えられないと誰もが痛感した。そこから、私たち、仙台市地域防災リーダー（SBL）という活動もスタートした。SBLには、町内会長などを補佐しながら、平常時には地域特性を考慮した防災計画づくりや効果的な訓練の企画運営、災害時には地域住民の避難誘導や救出・救護活動の指揮を行うなどの役割が期待されており、現在約 700 人（うち女性は約 180 人）が活動している。

また、東日本大震災は金曜日の 14 時 46 分頃に発災した。平日のこの時間帯に家にいるのは主婦や老人、幼児ということを考えると、女性がもっと地域の防災活動に関わっていく必要があるという考え方が自然と生まれた。東日本大震災後、仙台では女性の防災リーダーも多く活躍している。

(4) まとめとして

家族や親戚だけでなく、その人が大事だ、助けたいという思いから共助の気持ちが生まれてくると言える。そして、自助と共助でも対応できない部分に、公助というものが存在し、自助、共助、公助の三つがそろっていくことは、とても重要である。私たちは、ただその恩恵を受けるだけではなく、それをどうしたら最大限に活用できるかということ、日頃から考えていくことが必要だ。そして、そのような活動を継続していくこと、助けたいと思える人を一人ずつでも増やしていくことが、私たちの使命だと思う。



開催地より

ご自身の東日本大震災時の体験談を交えながら、避難所や共助についてお話いただいた。本日まで参加いただいた自主防災会の方々には、防災について再認識してもらったいい機会になったと思う。